

一心帰命と一心願生

延 塚 知 道

はじめに

『大無量寿経』への信順を、人類で初めて明確に表明したのは世親（天親）の『浄土論』である。それは「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安乐国」と、『大経』の阿弥陀如来とその浄土への信心の表明から始まる。この文は言うまでもなく「世尊我一心」という信心が、二つの内容で述べられている。その一つは「帰命尽十方無碍光如来」であり、もう一つは「願生安乐国」という表明である。「一心帰命」は回心を表すから、その対象は尽十方無碍光如来である。論の当面で言えば、仏八種莊嚴功德に明らかにされていることに当たる。もう一つの「一心願生」の方は、回心に始まる願生浄土とか難思議往生という念仏生活であるから、その対象は浄土である。論の当面で言えば、国土十七種莊嚴功德に明らかにされていることに相当する。このように一つの信心であっても、二つの契機で述べられその対象が一応区別されているのだから、一心帰命と一心願生とを混同してはならない。本論ではその違いと注意すべき点に焦点を当てて、難思議往生という念仏生活がいかにあるべきかを、明確にすることに主眼がある。

一 『大経』下巻の構造

1 『大経』の一心帰命

世親が他力の信心をこのように表明したのは、『大経』下巻の釈尊の教説によっているからである。下巻はまず第十一・必至滅度の願成就文と第十七・諸仏称名の願成就文と第十八・至心信樂の願成就文とが最初に掲げられる。

〔聖典〕・四四頁) この第十八願の成就文が終わると、すぐに三輩章が説かれる。ここは『観経』で言えば、上品上生から下品下生の九品に相当するところであるから、親鸞は第十九・修諸功德の願の成就文と読んでいる。したがってこの三輩章と第十八願の成就文が背中合わせに説かれるところに、自力から他力への翻り、つまり親鸞が「雑行を棄てて、本願に帰す」と表明する回心(一心帰命)が説かれている。もちろんその信心は第十七願成就の称名念仏への帰依であり、そこには必ず滅度に至るべき位に住したという、第十一・必至滅度の願の成就が臨まれているのである。したがって親鸞は『三経往生文類』で、

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらしに住して、かならず眞実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。このゆえに大経往生ともうす。また難思議往生ともうすなり。(『聖典』・四六八頁)

と、本願力による衆生往生の因果が、第十一願成就文と第十七・十八願成就文にあることが、確かめられている。このようにここまでは、「十方衆生」が主語であるから、親鸞はここまでで衆生往生の因果が完成していると読んだのである。

それに対して次の「東方偈」からは、主語が「他方国土のもろもろの菩薩衆」に替わる。主語が違うということは

土俵が違うのだから、これまでの所と同列に見ることが出来ないであろう。ここは十方諸仏の国の菩薩衆が、浄土に往生し阿弥陀如来に見えて、還相の菩薩として浄土から教化に出ることが、謳われている。

『大経』上巻の本願文に返して見れば、第四十一願から以降の主語が「他方国土のもろもろの菩薩衆」になっている。ただ第二十二・還相回向の願だけが同じ主語になっていることから、この願が第四十一願以降の願を代表し、その意味を先取りして説かれていると推測できる。つまり第四十一願以降は、菩薩の往観と還相回向が説かれているのである。

したがって、「東方偈」(「往観偈」)が終わるといきなり、

仏、阿難に告げたまわく、「かの国の菩薩は、みな当に一生補処を究竟すべし。その本願、衆生のためのゆえに、弘誓の功德をもって自ら莊嚴し、普く一切衆生を度脱せんと欲わんをば除く」 (『聖典』・五一頁)

と、第二十二・還相回向の願成就文が説かれる。親鸞は、『教行信証』の証巻ではこの願を挙げないが、『文類聚鈔』ではこの文をそのまま、第二十二願の成就文(『聖典』・四〇八頁)として掲げている。したがって『大経』の「東方偈」から、三毒五悪段の前までの「他方国土のもろもろの菩薩衆」が主語となる浄土の菩薩の莊嚴功德は、この第二十二・還相回向の願成就文を総標として、菩薩の還相回向を説いている個所と親鸞は読んだのであろう。なぜならこの個所で親鸞が注目する成就文は、この第二十二・還相回向の願成就文しかないからである。

親鸞は、曇鸞の『浄土論註』の如来の回向に二種の相があるという教えに導かれるが、究極的には『大経』の釈尊の教えに帰って、如来の回向を往相と還相の二種類に分けたのではなからうか。ここではテーマが違うので詳細(拙著『無量寿経に聞く 下巻』教育新潮社刊)を省いただけ幸いである)は避けるが、先の「十方衆生」が主語のところは、如来の往相回向によって衆生に実現する教・行・信・証が説かれている。第十七・諸仏称揚の願成就文(行)、第十八・至心信樂の願成就文(信)、第十一・必至滅度の願成就文(証)と、その全体は『大経』(教)だけ

ら、親鸞は教巻冒頭で、如来の往相回向に衆生の教・行・信・証が恵まれると述べるのである。それに対してここは、第二十二・還相回向の願の成就が説かれている。

このように『大経』では主語を替えて、往相回向と還相回向とが明確に分けて説かれていることによって、親鸞は如来の本願力回向を二種類に分けたのであろう。

従来この段は、衆生往生の因果の果に相当する所と、ほとんどの講録や参考書が読んでいる。そもそもこれまでに『大経』の注釈書は少なく、古くは慧遠の大経義疏や、憬興の『述文賛』に代表される聖道門の注釈書しかない。聖道門なら「十方衆生」が他力の信心を起こして浄土に生まれて、浄土から教化に出て菩薩の自利利他を成就すると読むのは当然である。その聖道門の了解によってここを、衆生往生の果と読むのであろうが、親鸞に従って還相回向と読むべきであろう。

周知のように、親鸞は凡夫が菩薩になるとは決して言わない。そうではなく親鸞は煩惱具足の凡夫を徹底して「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまじ」（『聖典』・五〇九頁）と謳うように、教化は釈尊と諸仏善知識に譲るのである。したがってこの段は、第二十二・還相回向の願に乗托して浄土から還来し、『大経』を説いて下さった釈尊を初めとする、諸仏善知識の教化を表していると読むべきではなからうか。

これまで尋ねたように、『大経』下巻の三輩章までは、衆生に教・行・信・証を恵む如来の往相回向が説かれる箇所、特に衆生が浄土真宗の礎石である一心帰命に立つ箇所である。「東方偈」から三毒五悪段の前までは、「他方国土のもろもろの菩薩衆」を主語として、菩薩の往観と還相回向が説かれる箇所である。

2 『大経』の一心願生

さて、三毒五悪段は、『平等覚経』、『大阿弥陀経』、所依の『大経』の旧訳には収録されているが、新訳の『如来

会』、『莊嚴経』の二経にはそれがない。おそらく旧約と新訳とでは、經典の伝統が違うのであろう。『教行信証』では、親鸞が必ず所依の『大経』と『如来会』とを連引するのは、その文献的な違いをよく知っているからであろう。

また、三毒五悪段では中国思想の影響もあつて自然という言葉が多用され、智慧段で慈氏菩薩となつている訳語が、ここでは弥勒菩薩となつていることなどから、ここはシルクロードか中国あたりで、後に付加された箇所であることが定説となつている。そのため文献学的には軽んじられる傾向にあるが、親鸞の思想研究からすれば、難思議往生という衆生の念仏生活を表す大切な箇所である。また親鸞の独自の思想である、願力自然を読み取った箇所であり、さらに真仏弟子の意味や弥勒等同を読み取った箇所でもあるので、親鸞の思想研究から見れば、『大経』の眼目といつてもいい箇所である。それらを概観しながら、一心願生の意味を考えてみたい。

① 弥勒等同

『大経』の下巻は、阿難に説かれるが、この三毒五悪段になると対告衆がいきなり弥勒菩薩に替わる。弥勒は必ず仏になることが決まっている一生補処の菩薩であるから、あえて説法する必要はないように思われる。それにも拘らず釈尊が弥勒菩薩を呼び出すのは、ここからは仏に成ることが決まっている者の念仏生活を教えているからであろう。親鸞はこの三毒段から、二文を『教行信証』に引文している。どちらも信巻の眞の仏弟子釈に引いているのでそれを見てみよう。

（『大本』に言わく）必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生して、横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉じん。道に昇るに窮極なし。往き易くして人なし。その国逆違せず。自然の牽くところなり（『聖典』二二四三頁）

この文は三毒段の最初に掲げられていて、親鸞が特に大切にしている文である。信巻ではこれと同義で、文言もほぼ同じ『大阿弥陀経』の次の文が連引される。

『大阿弥陀経』に言わく、超絶して去ることを得べし。阿弥陀仏国に往生すれば、横に五悪道を截りて、自然

に閉塞す。道に昇るに之極まりなし。行き易くして人あることなし。その国土逆違せず。自然の牽く随なり。

〔聖典〕・二四三―二四四頁

この二文を書き下して読むとほとんど同じ文に見えるが、漢文では『大経』は「必得超絶去」であり、『大阿弥陀经』の方は「可得超絶去」となっている。親鸞は真仏弟子の定義を「必可超証大涅槃」と「金剛心の行人」の二つで確かめているが、この定義の「必」と「可」の二つの文字を所依の『大経』と異訳の『大阿弥陀经』とで、釈尊の教えとして確認したかったのであろう。いずれにしてもこの文は、真仏弟子の定義に関わる重要な文章である。

もう一つの引文は、

それ至心ありて安楽国に生まれんと願すれば、智慧明らかに達し、功德殊勝を得べし、と。

〔聖典〕・二四五頁

という文である。これは真仏弟子の定義が終わって、彼が本願力に賜る功德とそれを生きようとする具体性を表す部分にある文章である。

もともとの三毒段では、その最後に説かれる文章である。三毒の煩惱が詳しく説かれた後、釈尊が弥勒菩薩に、本願力に賜る仏の智慧と大涅槃の功德を説いて、だからこそ、本願力により煩惱を超えて浄土に生まれよと、教誡する言葉である。

このようにこの二文は三毒段の最初と最後にある文で、真仏弟子の定義と本願力に賜る智慧と大涅槃の功德とが説かれる重要な文である。どちらも三毒五悪段からの引文は、真仏弟子にあることから、親鸞はこの段を、回心によって世を超えた人、つまり真仏弟子の念仏生活を説く箇所と読んだのであると思われる。

この三毒五悪段が終わると仏の智慧を説く智慧段が開かれるが、ここでは釈尊が「その時に、阿難および慈氏菩薩に告げたまわく」〔聖典〕・八〇頁と、阿難と弥勒とを同時に呼び出して説法する。『大経』下巻で釈尊は、阿難に

説いていた説法を、三毒五惡段ではいきなり弥勒を呼び出し、さらに智慧段になると両者を同時に呼び出して説法する。これを受けて親鸞は、眞の仏弟子の結縁に次のように記している。

眞に知りぬ。弥勒大士、等覺金剛心を窮むるがゆえに、龍華三會の暁、当に無上覺位を極むべし。念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。かるがゆえに「便同」と曰うなり

〔聖典〕・二五〇頁

このように宗祖が、念仏者（眞仏弟子）は弥勒菩薩と等しいと言うのは、釈尊の『大経』の対告衆の変遷に忠実に従って、釈尊の意図を讃仰しているからだと思われる。

② 願力自然

『大経』では自然の語が多く使われていて、上・下巻合わせて五十六箇所を数える。上巻の自然は全て浄土の無為自然（涅槃の覺り）を表すが、三毒五惡段のほとんどが迷いの行為によって苦しみを重ねる業道自然として使われる。この無為自然と業道自然のちょうど分水嶺に当たる文が、先に引用した三毒段の初めにある文である。大切な文なので再度引文したい。

必ず超絶して去ることを得て、安養國に往生せよ。横に五惡趣を截りて、惡趣自然に閉じん。道に昇ること窮極なし。往き易くして人なし。その国逆違せず。自然の牽くところなり。

〔聖典〕・五七頁

この大切な文章を、親鸞は『尊号眞像銘文』で、次のように解説している。

「惡趣自然閉」というのは、願力に帰命すれば、五道生死をとずるゆえに自然閉という。閉はとずというなり。

本願の業因にひかれて、自然にうまるるなり。（中略）眞実信をえたる人は、大願業力のゆえに、自然に浄土の業因たがわずして、かの業力にひかるるゆえにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきまりなし、とのたまえるなり。しかれば、自然之所牽ともうすなり。（傍線筆者）

〔聖典〕・五一四～五一五頁

このように「悪趣自然閉」と「自然之所牽」の自然を、法蔵菩薩の大願業力の自然、つまり「願力自然」と読み取っていることがよく分かる。業道自然によって迷いの人生に沈む衆生を、如来の願力自然によって、浄土の無為自然（大涅槃）に転じるのである。無為自然や業道自然の語は他の經典にも説かれていて、大乗仏教でもよく使われる語であるが、願力自然は『大経』の核心を表す思想として、親鸞が独自に読み取った造語である。この願力自然が『教行信証』では、本願力回向として表現し直されていくことはすぐに分かるであろう。親鸞は、ここに『大経』の仏道の眼目があることを、三毒段の「必得超絶去」の文から教えられている。それはこの文が、無為自然と業道自然の分水嶺に配置されているからである。

③ 三毒五悪段

これまで、三毒五悪段から読み取った親鸞の發揮について述べてきたが、ここで少し、この段そのものの課題について触れておきたい。もしこの三毒五悪段がなければ、『大経』の全てが如来の世界だけになって、それが衆生の生活とどう関わるのかが分からなくなる。この段があることによって、浄土に照らされた娑婆の念仏生活の意味を教えられるのである。

ここに説かれる三毒とは、貪欲、瞋恚、愚痴の煩惱のことである。貪欲とは砂漠で水を求めるように物をむさぼりに執着すること、瞋恚とは腹を立てること、愚痴とは何が真実かわからない無明煩惱のことである。如来の智慧に見抜かれている衆生は、この煩惱の塊なのだから、親鸞がこの世は「地獄一定すみかぞかし」と答えたのもよく分かる。この三毒の煩惱が源になって、衆生の具体的な五悪の生活があるのだから、念仏生活（難思議往生）においては、三毒の煩惱が衆生の最も根源的な問題になるのである。

貪欲のところでは、田んぼや財産がある者があることで憂え、ない者はないことで憂うると教えられている（『聖典』・五八頁）。ということは、財産それ自体に問題があるのではなく、財産に執着する衆生の心に問題があることを、

釈尊が教えているのである。

瞋恚も愚痴も同じように説かれるが、貪欲と瞋恚は生活の中でまだ反省ができる。しかし愚痴の煩惱は無明煩惱であるから、衆生の反省が届かない。なぜなら反省している心そのものが自力であるからである。無明煩惱とは、何が真実か分からないことである。そうであれば、自分を立て自分を守ろうとする自己保身しか残らない。つまり愚痴とは自己執着のことであるが、この煩惱は反省を超えて深いので、如来の智慧に遇うほかはない。だから、この愚痴の煩惱の所だけは、特に如来の教えとの対比の中で説かれている。つまり仏の教えに遇わなければ、絶対に分からない根本煩惱こそが、愚痴であることがよく分かる説き方になっている。

親鸞が『一念多念文意』で、

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと

〔聖典〕・五四五頁

と善導の二河譬の解釈をするが、ここで無明煩惱が根本煩惱と説かれるのは、この三毒段の釈尊の説法の説き方によるのだと思われる。

この三毒五悪段で釈尊は、一切衆生の根源が三毒の煩惱であることを教え、本願力によってそれを超えよと教え諭しているのである。そもそも煩惱なんて仏教に遇わなければ問題にならないし、むしろ生きがいになると勘違いすることさえある。だから『大経』では、最初に一心帰命の信心が説かれ、その信心を生きようとする者に対して、最後に難思議往生の道が説かれるのである。貪、瞋、痴の煩惱を超えて人間が人間以上の仏に成る道、それが難思議往生という我われの念仏生活である。

④ 難思議往生の生活規範

よく「そのままでもいい」とか、「真宗には生活規範がない」などと聞くことがあるが、親鸞においては決してそう

ではない。法蔵菩薩が真実の心で浄土を建立する勝行段と三毒段とは、対応しながら説かれている。

不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植して、欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。欲想・瞋想・害想を起こさず。(中略) 少欲知足にして、染・患・痴なし。(中略) 和顔愛語にして、意を先にして承問す。(中略)

三宝を恭敬し、師長に奉事す。

〔聖典〕・二七頁

と法蔵菩薩は、衆生の貪、瞋、痴の煩惱とは異質な、真実心で修行したことが説かれる。その貪欲と異質な心として「少欲知足」が説かれ、瞋患と異質な心として「和顔愛語」が説かれ、愚痴と異質な心として「恭敬三宝」が説かれている。もちろんこれは法蔵菩薩の願心であるが、それに生きようとするのが真の仏弟子であるから、その生活目標が「少欲知足」、「和顔愛語」、「恭敬三宝」の三つになるのだと思われる。要するに、称名念仏の智慧(恭敬三宝)によつて三毒の煩惱を超えて(少欲知足)、一切の人を如来の子と見て懇ろに接しながら(和顔愛語)、浄土に生まれて往く者になりなさい。それが念仏生活、難思議往生の宗教生活であると教えているのである。

親鸞が関東の門弟に送った手紙には、三毒の煩惱を超えよと繰り返して説かれている。例えば、第一通に次のように説かれる。

無明のえいもさめやらぬに、かさねてえいをすすめ、毒もきえやらぬに、なお三毒をすすめられそうらうらんこそ、あさましくおぼえそうらえ。煩惱具足の身なれば、(中略) いかにもこころのままにあるべしともうしおうてそうらうらんこそ、かえすがえす不便におぼえそうらえ。

〔聖典〕・五六一頁

ここに誡められているように、「無明の酔いもさめていないのに重ねて酔いを勧め、三毒を勧めていることには驚くほかはありません。煩惱の身だからそのままでもいいなどと言いつけていることは、どう考えても困ったことです。」これが「世をいとうしるし」、つまり念仏往生の証(しるし)である。一心帰命の場合には、そのまま(凡夫のまま)の救いを言うことができるであろう、しかし一心願生においては「どう考えても困ったことである」と、親鸞が

言うのである。それを肝に銘ずべきであらう。

第二通には、もう一つ「世をいとうしるし」が説かれるので、挙げておきたい。

ともの同朋にもねんごろのこころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにてもそうらわめ

【聖典】・五六三頁）

このように親鸞は、あらゆる人を如来の子と見て親しみ合い、三毒の煩惱（自力の執心）を超えていくことこそ、難思議往生という念仏生活の証（しるし）なのだと教えている。そもそも宗教生活に生活規範がなければ、その宗教はないに等しい。我われはこの三毒五悪段の教えをよく聞いて、それを念仏生活の中で表現するべきだと欲うことである。

二 親鸞の帰命と願生

1 回心

これまで尋ねたように『大経』の釈尊の教えに従って、世親は本願の信心を「一心帰命」と「一心願生」の二つの契機で表明した。親鸞はそれを受けて「三心一心問答」では、第十八・至心信樂の願を二つに分ける。

前半の「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん」の方は「本願信心の願成就の文」【聖典】・二二八頁）と名付けて、一心（至心・信樂）に大涅槃の覚りが開かれることを証明している。

また後半の「心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く」の方は「本願の欲生心成就の文」【聖典】・二三三頁）と名付けて、如来の欲生心に本願の回向心を見出して、それによって実現する難思議往生を明らかにしている。

このように、「三心一心問答」の前半は「必可超証大涅槃」に凝集され、後半は「金剛心の行人」に凝集されて、

やがて先ほど尋ねた信巻の、真仏弟子釈へと着地していくのである。このような仕方によって、親鸞は大乗仏教の浄土教に対する批判に応え切っているのである。つまり、浄土教は凡夫に対する方便の教えであって、「凡夫は覺りを悟ることはできない」し、「仏道を歩くこともできない」という批判に対して、「凡夫であっても他力の信心には、本願力によって大涅槃が開かれる（必可超証大涅槃）」と、「凡夫であっても如来の欲生心の回向によって命終わるまで大涅槃に向かって歩めるのである（金剛心の行人）」と、この二つの証明をもって大乘の批判に答えるのである。このように『大経』の本願の信心は、涅槃を開く「一心帰命」の回心と、涅槃に向かう「一心願生」の往生という、二つの契機によって衆生に現れるのである。

その回心について親鸞は、『唯信鈔文意』で次のように述べている。

回心というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。（中略）自力のころをすつというは、ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのみず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

〔聖典〕五五二頁

このように親鸞は、回心とは優越感や劣等感の相対分別を超えて、煩惱の身のままで無上大涅槃に至ると説いている。この回心（一心帰命）を契機として、無上大涅槃に向かう難思議往生という念仏生活が始まるのである。難思議とは、私たちの分別が及ばないという意味なので、難思議往生とは本願力による往生である。人間は良心や正義感という自力が最後の依り処になるから、往生もそれに依ると考える。しかしその分別の全体を愚かと知らされて名号に帰し、本願力に依らなければ、難思議往生という宗教生活には立てないのである。

親鸞はその本願の名号について、『教行信証』では大行という独自の了解を展開する。行巻の標挙は「諸仏称名の願 浄土真実の行 選択本願の行」と掲げられるが、「選択本願の行」とは、師法然から伝統された称名念仏である

ことを示している。もう一つの「浄土真実の行」の方は、親鸞独自の了解である大行を表す言葉である。「浄土真実」とは、「我依修多羅 真実功德相」と世親が表明する、「真実功德相」を示す言葉である。要するに『大経』に説かれる阿弥陀如来（大涅槃）と浄土を指す、『大経』の核心を表す言葉である。

最近では学会などでも「顕浄土」などと、『教行信証』の題号の浄土真実を、浄土で切ることが流行っているが、『教行信証』は浄土真実（大涅槃）を明らかにしている『大経』の論書であって、『観経』のように浄土を明らかにしているのではない。その証拠に『教行信証』の中で、往生を明確に規定している所はない。だから善鸞事件で、第十八願の往生が「しほめるはないたとえ」（『聖典』・六二二頁）られ「第十八の本願をすてまいらせおうてせうろう」（『聖典』・五九八頁）ということが起こったのである。親鸞はその思想的な責任から、八十三歳で『三経往生文類（略本）』を表し八十五歳で広本を書いて、改めて三経による往生を規定し直したのである。

『教行信証』は『大経』の論書として、本願力による教・行・信・証を明らかにし終わった証卷の結釈に、「しかれば大聖の真言、誠に知りぬ。大涅槃を証することは、願力の回向に藉りてなり」（『聖典』・二九八頁）と書かれているように、難思議往生という念仏生活がそのまま大般涅槃道であることを明らかにして、浄土真宗が大乘の至極であることを証明したのである。

さて親鸞は行卷冒頭で、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。

かるがゆえに大行と名づく。

（『聖典』・一五七頁）

と、『大経』の行を、「無碍光如来の名を称する」と規定し、それには善法・徳本が包摂されていると言う。善法・徳本とは法蔵菩薩の五劫思惟と兆載永劫の修行によって建立した浄土と大涅槃の覚りである。だからこの名号に帰命す

れば、すぐに煩惱の身のままで大涅槃の大きな海のようなはたらきに包まれる。それを大行と述べるのである。

その意味が分かり易いように、親鸞の和文によって尋ねてみよう。例えば、『一念多念文意』では、次のように説いている。

真実功德ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたもうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり。

〔聖典〕・五四三頁

あえて意味を取れば次のようである。「本願の名号は、真実のはたらきそのものである。名号には、世間の相对分別を超えた一如の真理が円満しているので、大きな宝の海に譬えるのである。一如の真理とは、如来の大涅槃の覚りである。法と言ってもいいし、如来と言ってもいい。宝海というのは、阿弥陀如来が一切衆生を救おうとする善根が満ちているので、凡夫の身のままで嫌わず、へだてなく、大涅槃の覚りに導くから、大海の水が一切をこばまない事に譬えるのである」。これで大行の意味が、よく分かるであろう。「浄土真実」とは「真実功德」であり、本願の名号である。それは名号の方から一如の涅槃界を開き、凡夫の身を嫌わずそのまま一如の世界に包み、煩惱の身が終わるまで大涅槃に導くのである。もう一文引用してみたい。

「大宝海」は、よろずの善根功德みちまわまるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、

〔聖典〕五四四頁

先の文が大行を述べているとすれば、この文は大信に焦点を当てて述べている。つまり親鸞は、本願の名号を信じる心（大信）の内に、煩惱の身のままで何の努力もなく無上大涅槃の功德の海に包まれるという、大きな感動を述べて

いるのである。

要するに、親鸞の「大行・大信」とは、如来の方から衆生の相対分別を破つて一如の眞実に包む。その際煩惱の身を嫌わず、へだたず、衆生の努力は必要ではないと言っているのである。

これまでの大乘仏教の行は、修行によつて涅槃の覚りを悟ると言われてきた。浄土教であつても法然までは念仏往生を旗印にするから、念仏の行によつて浄土に往生するという觀念が払拭できない。つまり仏道の常識として、衆生を涅槃に向かわせるとか、浄土に往生するというように、行とは衆生↓如来の覚りへという方向を持つてきた。しかし親鸞独自の「大行・大信」の了解は、如来の方から大涅槃を開くのである。これまでの大乘仏教の衆生↓如来という方向を、如来↓衆生へという方向に、行の觀念を逆転させたのである。これまでの大乘仏教の行の伝統を覆すという意味を「大行・大信」の字に込めて、浄土眞宗は如来の一人ばたらきであることを明確にしたのである。

周知のように、世親は七祖の中で初めて「本願力の回向」という言葉を使うが、『大經』の「仏道を菩薩道として表現しているために、この言葉は出第五門の菩薩その人の本願力回向である。曇鸞の『論註』は、「世尊我一心 帰命（礼拝） 尽十方無碍光如来（讚嘆） 願生安樂国（作願）」の前三念門は衆生に実現する仏道、發起序を境にして、觀察・回向は阿彌陀の本願力回向であることを明確にした。それによつて、衆生の仏道を成り立たせる根拠力を、阿彌陀如来に尋ね当てたのである。言うまでもなくそれを開いたのは、『觀經』による機の自覚である。親鸞は善導教學に鍛えられて自力無効に立ち、曇鸞の機の自覚をさらに徹底した。だから『大經』を「群萌を拯う」教えと感佩するのである。

このように時代が下ると、末法思想の深まりと共に、機の自覚が徹底してくる。そうであれば、凡夫を救う阿彌陀如来のはたらきの方を、より徹底して明確にしなければならないのは仏道の道理である。つまり自力無効の徹底に比例して、阿彌陀如来の本願力回向が顕わになつていったのである。

親鸞の『教行信証』は『大経』に帰って本願力回向を二種に開き、「群萌を拯う」教えだからこそ、阿弥陀如来の一人ばたらきを徹底した。当然それは、浄土真宗の全てに亘っているが、先の大行・大信という親鸞独自の發揮も、その一環の一つである。

さて本題に戻ろう、親鸞の言葉を尋ねると『大経』に依る一心帰命とは、煩惱の身のままで、如来の覚りに包まれることであつた。回心というよく自力無効を強調するが、それは『大経』の本願に目覚めるための契機であつて、目的ではない。自力無効を教える『観経』は、本願に目覚めるために必要な門だから、要門といわれる方便の教えである。一切衆生の救いは、何と言おうと『大経』の本願力に目覚める他にはない。本願力による救いこそ、目的である。

その本願力によつて大涅槃に包まれた感動の方が、自力無効の懺悔の悲しみよりも、もっと大きい。眞実に包まれた感動は、懺悔の涙を包んで、それとは比較にならない大きさである。「なぜあんなに機の自覚を繰り返すのでしょうか。人は黙ってビールでしょう」と酒が身に染み渡っていくことを、一如に包まれた感動になぞらえて伝えようとしていた師の言葉に、自然と笑みがこぼれるばかりである。

親鸞は無上大涅槃に包まれて相対有限の苦しみを超えた、その大いなる感動を「大宝海」に譬えているのである。このように「一心帰命」が表す回心は、煩惱の身のまま無上大涅槃のはたらきに包まれることである。大涅槃を悟るのは聖道門の教理である、そうではなくて煩惱の身（自力無効）のままに一如の眞実に包まれる。そこに他力の仏道の面目が輝いているのである。親鸞は、それこそが本願力による救いなだと述べている。

2 『教行信証』の難思議往生

それに対して「一心願生」が表す難思議往生（大経往生）とは、回心に始まる念仏生活のことである。『大経』下

卷の三毒五悪段以降が、その念仏生活を説いていた。しかし回心があつたからといって、煩惱の身がなくなるわけではない。むしろ本願によつて貪・瞋・痴の三毒の煩惱が露わにされて、それを超えた浄土（無上大涅槃）に帰ろうと欲う往生の生活が始まるのである。

その浄土のはたらきを世親は二十九種類説いているが、その中から親鸞は証巻で、『論註』によつて四つの功德だけを選んでいゝ。そうであればこの四つの功德に、浄土が開かれた人の念仏生活が、象徴的に表されていることになる。この証巻の浄土莊嚴によつて、大経往生（難思議往生）がどのような具体的な生活を聞くのかを、尋ねてみたい。第一に「莊嚴妙声功德成就」の文が掲げられる。世親が「梵声の悟り深遠にして微妙なり、十方に聞こゆ」と謳うところである。「本願の名号の覚りは深く、世界中に名号の声が響きわたっている」という意味であるが、親鸞が浄土を説く時に、最初に「名号の声」を掲げることから、『大経』の浄土は本願の声を聞くところにしか開かれない。それ以外は考えた浄土であつて、本願の名号に帰する以外に、我われを本當に救う浄土はどこにもない。

ここではそれを、次の引文で表す。

もし人ただかの国土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生まれんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなわち正定聚に入る。
〔聖典〕・二八一頁

この文は『平等覚経』にはないので、曇鸞の取意であろう。通常は「剋念して生ぜん」と願すれば、亦往生を得て、即ち正定聚に入る」と読むべきであるが、親鸞は「国土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生まれんと願ぜんもの」と読んでいゝ。本来正定聚とは、浄土に生まれて得る浄土の位で、必ず涅槃に至るべき位という意味である。それを親鸞は、願生者の信心に先取りして、先の『三経往生文類』の引文にあつたように、「現生正定聚」とするのである。身は凡夫であるから浄土に生まれてしまふわけではないが、本願の信心を因として、果の浄土がはたらき出て、現生に正定聚に立つ。ここに浄土莊嚴を自らの感動として語る、親鸞の立脚地がある。であればこそ、この「莊嚴妙声功

徳成就」を最初に掲げるのである。

二番目には、「莊嚴主功德成就」が挙げられる。我われはこの世界を生きるときに、何を主としているであろうか。三毒段では、貪・瞋・痴の煩惱に纏わるものしか主にできないと説かれている。例えば、財産とか地位とか名誉とか大切な人とか愛とか良心といったものである。それは大切だと思えても、三毒の煩惱の影に他ならないから、迷いを重ねるだけで何の頼りにもならない。

この証巻では、阿弥陀如来を主とすることが出来た者の生き方が、次のように説かれている。

もし人ひとたび安樂浄土に生ずれば、後の時に意「三界に生まれて衆生を教化せん」と願じて、浄土の命を捨てて願に随いて生を得て、三界雑生の火の中に生まるといへども、無上菩提の種子畢竟して朽ちず。何をもつてのゆえに。正覚阿弥陀の善く住持を径るをもつてのゆえにと。
〔聖典〕・二八二頁

阿弥陀如来を本尊とすることが出来た者は、本願の住持力によって、衆生教化の願いを生きる者になる。浄土が開かれてなければ、三毒に振り回されて、どちらに向けばいいのか、どこに命を懸けるべきかが決まらずに迷う他はない。しかしひとたび浄土が開かれれば、阿弥陀如来を主とし、その本願力によって世を超えていくことと、その教化に命を捨てていくことが説かれている。

これは『教行信証』の現生十種の益でいえば、最後の「常行大悲」の益と「正定聚に入る益」（『聖典』二四一頁）に相当すると思われる。この主功德に説かれる衆生教化の志願に、難思議往生の生き方がよく教えられている。それが二番目に「莊嚴主功德成就」が挙げられる意義である。

三番目には「莊嚴眷属功德成就」が挙げられる。眷属とは如来の親族という意味であるが、それが、次のように説かれている。

かの安樂国土は、これ阿弥陀如来正覚浄華の化生するところにあらざることなし。同一に念仏して別の道なきが

ゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。いづくんぞ思議すべきや。

〔聖典〕・二八二頁

我われの世界では、好き嫌い、都合がいいか悪いか、利用するかされるかという関係しかないが、浄土はどんな人も如来の覺りの華から生まれるから、如来の眷属として生きたいという願いが説かれるのである。

親鸞のお手紙でも、「ともの同朋にもねんごろのこのころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるし」〔聖典〕五六三頁と伝えられていた。要するに、如来の子としてお互いを尊敬し、親切な心で接することこそ、難思議往生の証である。これが三番目に「莊嚴眷属功德成就」が挙げられる意義である。

これまで尋ねた三つの莊嚴功德をまとめると、本願の名号に帰して（莊嚴妙声功德成就）、阿弥陀如来の本願の住持力によって三毒の煩惱を超え、それを教化したい（莊嚴主功德成就）。そして、あらゆる人を「ともの同朋」（莊嚴眷属功德成就）として生きて往きたいということである。したがって「莊嚴妙声功德成就」・「莊嚴主功德成就」・「莊嚴眷属功德成就」が、難思議往生という念仏生活の具体的な内容として説かれるのである。

ところが、それが最後の「莊嚴清浄功德成就」の、次のような文で締め括られる。

凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生まるることを得れば、三界の繋業畢竟して牽かず。すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得、いづくんぞ思議すべきや。〔聖典〕二八三頁

ここで言われる「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」ということを、親鸞はそのまま「正信偈」で、「よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり」〔聖典〕・二〇四頁と謳ったり、「惑染の凡夫、信心発すれば、生死即涅槃なりと証知せしむ」〔聖典〕二〇六頁と謳う。この「生死即涅槃」とは、大乘仏教の旗印そのものである。

この清浄功德は言うまでもなく、『浄土論』・『論註』では浄土の総相として二十九種莊嚴功德の最初に説かれる。しかしそれを親鸞は、この証巻で最後に置くのは、先に掲げた難思議往生の念仏生活の全体は、実はそのまま涅槃

に向かう人生であると説いているのである。つまり浄土教の往生は、これまで凡夫のための方便の教えのようにいわれてきたけれども、大経往生はそのままで、大乘仏教全体が目標にしている、無上大涅槃道であると言っているのである。

まとめ

これまで尋ねてきたように、一心帰命の回心を親鸞は、煩惱具足の凡夫のままで阿弥陀如来の大涅槃の覚りに包まれた、大いなる感動として述べていた。聖道門は涅槃の覚りを悟るのであるが、浄土教においては涅槃の覚りに包まれるのである。自力無効という徹底した分別の否定を通して、もともと存在そのものが在った一如の世界に、本願力によって引き戻され包まれるのである。曇鸞が「涅槃分」と言っていた分を親鸞が取るのは、煩惱具足の凡夫であればこそ、存在の根拠である一如の世界に帰ることが出来たという感動があったからであろう。凡夫を少しもたためわない、そこに群萌を拯う浄土教の特質がある。したがって、一心帰命を語る場合には、凡夫のままでということが大切である。

しかし難思議往生を語る場合には、親鸞が言うように「煩惱の身だからそのままでもいいなどと言っていることは、どう考えても困ったことである」という教えを、肝に銘じなくてはなるまい。

いずれにしてもこの論考で尋ねたように、仏道を標榜する以上は、難思議往生が大切である。本願力によって「人間が人間以上のあるもの（仏）になる道」、それが大経の仏道である。この念仏生活がなければ、仏道などないに等しいのだから、親鸞の説いた難思議往生の内容によく教えられながら、「難思議往生を遂げんと欲う」という、願いに生きなければならない。それが、我われのこれからの課題ではなからうか。